



多林蘇岐

目次

▲論説

稽程一千日
岐蘇林友を如何にすべきかをよみて

全上
冗語

▲學術

養成苗木に對する苗圃面積算出

▲文苑

男体山上より
秋の山路

▲雜報

學校記事
マラソン競走記

▲通信

寄宿舎通信二
會員消息
他

大正五年十一月二十五日 第八拾五號 (每星期一刊) 明治四十四年六月十四日 (第四種郵便物認可)

論説

稽程一千日 (其二)

會山子

信人の意氣を代表せる火山淺間の半腹は既に自紛を装ひ濛々たる噴煙は高く北天に向つて昇り北信の満山色濃かに霜は林間に白し信州山川の雄大は秋天麗朗の季に於て愈々其大を加ふるが如し

秋の野を百足の如き百騎かな
信山を紅に染めける日和かな

●曩者本誌上に縣内に行はるゝ腕扱入會消除に關して其前半を載せたる小生が其後半を數閱月の今日尙ほ言及するに至らざるの理由は蓋し本問題が入會權てふ不明確なる權利關係に宿因を有し尙研究を要する點の不尠に依るものに有之候に付き本文後論は姑くろの掲載を他日に期すべく候間不惡御諒察相願度候

●近頃林友誌の革新論者の相踵げるは寔に結構と存じ候、氣鋭なる二三諸君の卓説も喜ばしきが如くに被存候、彼の丸山君の根氣克く連載されし大論文(小生は其熱誠は人一倍體讀せしも名文章は精讀に至らざりしは残念なり)の論據は大抵推定に不難候文中『敬愛せる會山兄』も御書添への光榮を荷ひたらん(其褒貶何れの意味にもせよ)

如くに候へば旁何とか可申述筈に候へ共之れ亦後日に期すべく候

●客月以來の政界の混亂は新紙によりて其一斑を窺ひ得られ候、其の個々の押し出しには一カドの政客として迎へられ候大小半千知名の士が着眼點を議員頭數の多寡に置きて恰も頑是なき茶目坊式喧鬪の酣なるに際し政界の一角に超然として常に衆目の視線を一身に集め其の一片語一舉足直に話頭を中心となれる木堂先生が時節柄案外にも悠々國防の大義を説いて大向をアット言はせ候は誠に吾人の溜飲を下げたる事三尺餘痛快淋漓とは實に此事と可申今更ながら第一人者の目の着け所は違つたものと痛切に感じ申候、凡ろ着眼點の如何が人物價値の標準とも申さるべき乎と存候

●若し新紙の報導を真ならしめ又之れを實現せしめば本縣來年度の公有林野整理費の膨張、森林警察設置の措置は我が百五十萬の縣民と共に祝盃を舉げて不可ならずと存じ候、前者は現員四名を拾七名に後者は新に警察官三十二名を置き豫算額約一萬六千圓ばかり計上の如くに候
蓋廣袤八百三十九方里中林野面積其の八十五パーセント強、公有林野約五十万町歩、保安林約八万町歩を有し縣下平均水害損耗高三百萬圓に上り尙遠く濃尾遠並に北越各縣治水の鍵鑰を握れる本縣は林野行政の機

關としては尙過少の感は大いに有之候へ共
物事は諦めが肝心と申す事に候へば來年度
は此位にて辛抱致すべく候

○前陳十三名の増員(森林警察は茲に言は
ず)は其人選に於て一寸面倒を存候、吾徒
は此等人選には宜しく門戸を開放して普く
人材を各方面に求め一騎打ちにて健腕の牙
を合ひし合ひ集團となりては其の技能を競
ひ抱負識見を交詢して以て切磋研練する事
の極めて與多く其成績の優良なるべきを想
ふものに有之候

乍併小生は滿九ヶ年間の官界生活に於て遺
憾千萬に感じ候事は學歴ある者若くは少し
く役に立つ者程只々位階勲等があり難く又
一般的には俸給の多寡階級の上下が大の高
卑を定むるメートルと心得只管昇進に光明
を繋ぎ頭のみが徒に逆上して腰より下のフ
ラ付き人物の大多數なるを目撃せらるゝ事
にして彼の本縣の教育界を双肩に荷ひ名利
の外に超然として常に任務を生命とせる吾
が長洲佐藤縣視學の大を學ばんとするもの
の如きは極めて罕なる今日に候へば絶對的
にとは申す能はざるべく候も所謂當世的人
材即ち腰掛的、傳習的人物の成るべく少き
を得策と存じ候
叙上の見地より小生は我が同窓生中底力あ
り談ずるに足る同志の士の採用を得て是等
の連中と相提携して本縣這回の施設をして
愈々有効に終らしめん事を切に祈るものに

之有候以上
十一月四日 (北佐久、望月宿舍にて)

岐蘇林友を如何にすべ きやを讀みて敢て讀者 に一考を煩はす

在京城 本 多 生

古語に曰く「大を爲さむと欲すれば小より
始めよ」と然り而して百里の道は一步より
始めざるべからず徒に空理空論に走り誇張
龍大を恣にし世道人心を擾亂せしむるが如
きは切に慎まざる可らず。夫れ理想を實現
せむと欲すれば根柢を極めざるべからず根
柢定りて後初めて理想境に達するを得べし
我校生れて十有二歳而して我々の生命たる
宇宙の極りなきが如く亦極りなかるべし此
の無窮大なる生命に比すれば現在の生存夫
れ大海の一粟だも尙及ばざるべし
理想とは如何之れ云ふ可くして達すること
能はざる皆人の知悉せる所理想と欲望とは
相並行し極りなかるべし故に我々も生命の
ある限り理想あり欲望あり而して之れに達
すること永久なかるべし故に理想と稱する
は現在の理想にして永久の理想にあらざる
事を知らざるべからず
理想は各智識階級に依り異なるべし甲の理
想必ずしも乙の理想と一致せざるべし

理想は左記二項は小なくとも具備せざるべ
からず
一、理想は萬人通有性たらざるべからず
二、理想と實行とは伴はざるべからず
右二項具備せざる理想は空想に終り何等の
權威なかるべし翻つて吾校友誌上を見るに
記事頗る貧弱にして實に遺憾に堪へざれど
も記事貧弱なるが故に理想なしとするか母
校職員生徒は記事蒐集に苦辛しつゝあるは
誌上に歴然たり之れ誰れの罪か卒業生四百
の健兒何むするを夢むれるか一ヶ月三十日
一文を物するの暇なきや若し四百の健兒に
して眞に母校を思ひ林友を愛するの一念あ
らば誌上の美を爲す夫れ敢て難しとせむや
たまた書を投ずとせば屁理窟不平不満夫れ
何等の益かある百尺竿頭一步を進めて有益
なる記事に何分筆を染めざる世は多事なり
見よ歐洲の天地を此の間に處し我日本平和
の中に時を過すとは云へ尙屁理窟不滿に時
を移す程の餘裕を天は與へざる筈なり云ふ
を止めよ黙して働け而して書け。(終り)

林友の体裁及内容等に就きては賢明なる
諸先生及在校生諸君に委して可なり敢て
他の口を入るゝの愚を學ばざるべし

「岐蘇林友を如何にすべきや」 を讀みて再び丸山君に

岩 田 生

「いつたやうな感じを起さずには居られ
ません
丸山兄
林友の記事は貧弱だ、けれども名文だから
と言つて賞品はくれませんが、天地人の階級
は附けられてありません、投稿者は自分の
記事が載つたからとて快くは感じもしやう
が毫も名譽とは思ひません、されば名でな
い金でない、何んでありません、自分は校
友であるといふ自覺の上になつて、早く、
賤しいものを外にした美しい情と愛とに充
ちた叫びだと、私はこう考へるとき衷心感
謝せずにはゐられません
林友誌が讀者の機嫌をとつたり、その低級
な情緒や趣味に阿り讀者を華客とする現今
の多くの新聞や雑誌でない以上、そんなに
林友の記事を早く見るとは無理でありま
す、否うう見るのは見るもの、勝手であり
ます、けれども憐れとも見るがよろしい其
人は既に林友に對して「憐れ」といふ自覺
を持つた人でありますから、「貧弱」とも讀
むがよろしいその人は既に「貧弱」である
といふ自覺を持つた人でありますから、これ
やがて眞面目な革新論の由つて起る所以で
ありまして封のまゝ屑籠に投げ入れるに優
るもの實に萬倍であります
丸山兄
兄は「校友一般の自覺を起さない限り林友
の改革を論ずるは愚であり野暮である」と

丸山兄
林友改革に就いて兄の衷奥から進り出た絶
叫と眞摯な要求とは定めし我が校友諸兄に
深い感興を興へた事と思ひます、殊に堪へ
得ない様な微力を怖れつゝ林友編輯といふ
重荷を負ふて居る私共は人一倍の興味と厚
い感謝の念に驅られつゝ一句も忽にせず讀
了しました、讀み了ると私の頭の中には内
容の充實した、至情の溢れた、拘束されな
い、而も體裁の整つた所謂理想の林友誌が
髣髴しました、そして現在の憐れな林友誌
をして之れに近からしむる爲には現在其局
に居る私共が一層の努力を要すべきだと感
情は一入高まりましたがすぐの裏から起
るものは腐繩は到底倒木を引き起し得ない、
といふ捨て鉢の囁でありました
丸山兄

感情が静まると頭は汗へて更に私は靜に考
へました、實際林友の現状が多くの校友諸
兄から考へられて居るやうに、しかく悲境
のどん底にあるであらうか、しかく無價値
なものであらうかと、素より私は決して現
狀に満足するものではありませんが、私に
は見る眼がないせいか、執着し過ぎて居る
せいか、好愛し過ぎて居る爲か、それとも
自惚れが過ぎるか、吾が校友會の雜誌とし
て現在の林友誌はうんたに憐ればい者では
ないやうに思はれます
なるほど林友の記事には「何んだつたらな

い」「憐れな者よ」「何のつもりで」こうし
た記事もありませう、現にこれも一けれど
も讀者に慙んなさもしい感興を興へる記事も
決して落書でもたはむれでもありません、
確乎たる自尊心を以て筆を執るほどの人は
勿論「慙んなもの」が校友諸兄に讀まれるか
知らん」と不安の念にかられつゝ筆を執る
人もその記事はうのり自身にとつては決し
てはたから見るやうな無意義なものではあ
りません、而も一の文章にあれ報告にあれ
和歌にあれ之を原稿用紙に載せるまでには
其人にとつては相當の努力を要することと
思ひます、貧弱ではあるが美辭の連結には、
過ぎないが之れも吾が愛好する人達の手
なつたものだと思つたなればどうしてそこ
に斯様な冷笑的な感が涌きませう、それ
は折角の愛の繼たるべき林友は遂に何等の
意義をもなさないではありませんか
新聞や雑誌に見る、堂々と國家の經綸を論
ずる大文章にも、思想家氣取りの超然とし
た文章にも、悟りすましたやうな和歌や俳
句にもうの底には原稿料、名、天地人、賞
品とこんななものもがしつこく喰付い
て居るやうに思はれます、否眞に之等を超
越したものは實際に少くあります、名と物
とを緯とし眞面目を經としたものはまだし
も中には金と名とを得る爲のやせな一
種の技術としか思はれないものがあります
私はこんなものを讀む時こそ「憐れな者よ

説破せられましたが真に背ける論であり
ます、けれども自己と林友とが遠くかけは
なれて居る者に向つて林友に對する自覺と
言つたところで何等の刺戟をも感ぜません
林友を自分のものにして、そこにはじめて
諸種の不満や要求が起ります、私はこの意
義に於て總ての校友諸兄が今少しく林友に
近づいていたうきたい、我がものにしてい
たい

そんな記事にせよ歌にせよ「林友に載せや
う」と思ふほどの人は必ず林友に對して、
否校友に對して好い感じを持つた人である
と思ひます、殊に自分の記事が載つて居る
林友は一入よい感じを起させます、こうい
ふ感じは唯私ばかりではありません、
林友を受取つて好い感じを起さうと思はれ
たら諸兄は擧つて假令一行でも自分づもの
を載せてほしい、これやがて校友相互の愛
の継の一層堅く結ばれる所以であります
まいか

九月八日
去月八日は校庭に庭球大會が開かれました
近くは別項記事の如く、兄が三年間往來せ
られた懐しい上松と本校との間に遠足部の
マラソンの快擧がありました、庭球部にも
遠足部にも此等を催す爲めの經費豫算は組
込まれてはありませんが、まだそれ
に立つは經費だと思ひましたが、まだそれ
よりも先に立つ何物かがあることを知りま
す

冗語

桑花子

△現時の行政方法の大局に付てそれがよか
ろうと悪るかろうと自分が云々する資格は
毛頭もない又局面に付てさへも敢て口端を
いれることもいらないかも知れない、然し
自分の眼に映じたほんの一局面に付てであ
る、其處に不満を感じたとき誰れとなく相

談氣味に云つて見たいような氣がするのだ
△時代の趨勢もあらうけれど餘り形式的に
流れたではあるまいかと云ふことが多少ど
の方面にも認める事が出来ると思ふ例へて
云つたなら先般文部省の小學校教員の位階
について縣下に何名と限定したなどは、行
政上果して至當な方法であるかと考ふるこ
は出来ない、縦ひ縣下に何名あらうと他縣
下に一名もないとした處で、そんなことが
問題であるかどうか自分が淺見をふりまわ
すと一縣下に何十名何百名あらうとそれだ
けの價値ある人物について位階を與へたら
差支へない様に思はれる
△又官吏の給法について何年目に何圓の昇
給、何圓は特別給俸として其れ以上を限定
した様なものもある例へば森林主事の給法
である、こんな制度のもとに現在其位置に
ある人の意氣銷沈を訴へたり無能を叫んだ
りする上廳行政官などこそ、自分は其無能
を笑つてやりたいような氣がする、意氣銷
沈も無能となるも道理ではなからうか
人たる以上欲望を有し欲望有る以上理想を
有し欲望の無限漸進的である以上理想が無
限漸進であるとしたならば其理想其人達
にはむしろ理想でない強いられた未來とて
も云ふかが見透いた又限受せられたも
のであつたならどうして意氣が掲らう、ど
うして無能にならないで居られようか自然
パンの爲めに生きて行くと云ふような動物

性の人間になつて西行の「食ふて糞して寝
工起きてさて其次は死ぬるばかりか」とな
つてしまふと思ふ。

△而して此の問題に付いて一つ頭を回らし
てこんな境遇にある人々に付て考へて見た
時は如何であらうか、自分はそれらの人々
と一所になつて上廳行政官の無能ばかりも
笑つて居られないように思はれる、其中間
に立て平面鏡の下からのういて見た時やつ
ぱり其内に意氣銷沈の人々を見出す事が出
來ると思ふ、縦ひ外界の事情からしても意
氣銷沈は意氣銷沈に違ひないから

△天悟して其境遇中に何者かを求めて真に
安んじて居るに何等の不満を持たない
人々、例へ其境遇にあらうと自己の希望
する處に到達すべき道程にある人々を除い
て其他の人々に、對してやつぱり意氣銷沈
と云ひたい而してこれとて厚い面をかむつ
ておしげもなく云つたならつまり意氣銷沈
と叫びたい何故なればそれにしては餘りに
なまぬるい方法だと思はれるから

△「前はお前の力で家全部を養つて呉れ」
と云ふ様な意氣地ない親を持つた人ならば
いざ知らず自己一人の自由な身体を持つた
青年としては、少し鮮やかなも少し元氣
あるも少し意氣ある生活に向て進むべきで
はあるまいか、宏遠な前途に向つて最も大
きい希望を持して
△而して之れは唯自己一人の淺見に過ぎな

の年々こんな淵に青年を沈めて行く悲劇は
果して行政方法の罪であるか、又自ら沈ん
で行く青年の罪であるか又こんな見方が違
つてゐるかも知れない、それは讀者に向て
公平な判断を願ひたいと思ふ
(五、一一、四、寸感録中より)

學術

養成苗木に對する苗圃面積算出公式に就て

拔萃者 函山生

一定数の苗木を養成せんとする場合にこれ
に要すべき苗圃の面積は何程なりやと云ふ
問題は實際上屢々起る問題にして其度毎に
複雑なる計算を行ひ爲めに貴重の時間を空
費すること少なからず或は場合によりては
從來の經驗に基づきて其面積を大畧求むるこ
とあれども到底充分なりと云ふ可からず本
多博士は「の著造林學に於て普通の場合に
於て年々引續き拾萬本宛の山出苗を養成せ
んとすれば杉は六反歩扁柏は八反歩花柏は
七反歩赤松、黒松及び落葉松は各一五反
歩樺は各約五反歩の面積を要す」と述べ且
つ今一町歩の植付本数を六十本とするとき
は年々の苗圃の大きさは年々の造林面積に對
して杉は三、三六〇扁柏は四、六〇赤松黒松

落葉松は九〇樺は三〇の割合にて可なり
と説き從來の經驗によりては大體の標準面
積を示したれどもこれ等はもとより極めて
大凡の標準にして時と場合に依りては或は
此の二倍の面積を要することあり或はこの
半分の面積にて足ることあり且つこの標準
面積は如何なる因子に基づきて定めたるもの
なりや明かならず従つて果して如何なる場
合にこの標準面積に何程の加減をなすべき
やを知ることは能はず又八戸林學士は「の著
造林學論に述べて曰く
余の實驗に基ける考案によれば三四年の
苗木を養成する場合に槩略下種床の二十
倍の面積を要し若し定置苗圃にて連年同様
の事業を繼續するときには三十倍乃至四十倍
の面積を要するを標準とすべしこの外畦畔
道路の面積として下種床の二分の一の面積
を加ふるを適當とす例へば扁柏或は杉の種
子一斗を下種するに一坪につき二合と定む
れば下種床の面積五十坪道路畦畔等二十五
坪合計七十五坪を要しこれを養成して山出
苗を得るには千五百坪更に毎年同量の種子
を播く時は之に對する苗木の養成に就き二
千二百五十坪乃至三千坪の地積を備へざる
べからず
即ち同氏の實驗數は只杉扁柏のみにして而
も種子の發芽率は何程のものを標準とせる
や明確ならず且面積算出の方法に多少の疑
點を挿む餘地なしとせず

曰梓林學士は、の著苗圃及新植に於て稍理論的に而も具體的に一定数の苗木を連年山出しせんとする場合に於ける所要の苗圃面積算出方法を誘導せし前記二氏のものに比して有益なりと感ぜられたるものは、一般的の公式を導くに至らずこれを一般の場合に應用せんとすれば甚だ複雑なる手数を要するの憾あり其他從來我國に於て發行されし造林學の著書及林業に關する諸雜誌を汎く渉獵したれ共皆大同小異にして前記のもの外に出でず又之れを獨塊其他先進國に就て見るも未だ理論的に一般の公式を誘導したるものあるを見ず只マイル氏はその著造林學に於て所要苗圃の面積は若し一回床替を山出苗として使用するときは造林せんとする山地の面積の大畧四乃至五倍若し床替せざる苗木を使用するときは凡う二乃至三倍あれば足れりとなし單に大體の標準を示したるに過ぎず蓋獨塊諸國に於ては苗圃に於ける床替は我國の如くしかく頻繁に行はず又全く床替を行はずして下種床に於ける一年生苗木を直ちに山地に送ること多きが故に所要苗圃の面積を算出するに實際土左程の面倒を感ぜざるがためならんか然るに我國に於ては少くとも一回の床替を行ひ多きは二三回の床替によりて山出苗を養成し又二三回の床替を爲したるものと雖もなほ其の成長の不充分なるものは尙更に二年もとの床替地に殘存せしめて山地に送り出す等

其の間幾多の複雑なる事情によりて各種の床地を要するが故に一定数の山出苗を毎年養成せんとする場合に果して幾何の面積の苗圃を要すべきかを計算するは甚だ面倒にして時間を空費すること夥しこれ竟畢面積算出の一般公式なるが故に各の場合に隨時に煩雜なる計算をなすを以てなり
故にこの欠を補はんがために不完全ながら上記の面積を容易に算出することを得べき一般公式を導きたりこの公式を應用するときは一定の樹種毎に例へば十萬本の山出苗を毎年引續き養成せんとすれば何町歩の苗圃面積を要すべきか一斗の播種量に對してはその播種床の面積は何程第一回床替床の面積は何程第二回床替床の面積は何程且つ又連年引續き一斗の種子を播種するときは何程の苗圃面積を準備すれば可なるべしか尙又年々一斗の播種量に對して毎年平均何程の山出苗を養成し得べきか等その他苗圃事業に於て吾人が知らんと欲する種々の有益なる數字を極めて容易而も比較的正確に求むることを得べし
今播種せんとする種子の量をM一坪當りの播種量(合)を以て表はすときは播種床の面積は次の如し
$$P_0 = \frac{M}{E} \dots \dots \dots (1)$$
次に四を種子一合の粒數としRをその發芽率としPを發芽苗の殘存率としMを第

一回床替苗の一坪當り本數とすればMxExは播種せんとする種子の粒數を示しこれにRを乗すれば發芽すべき苗木數を示しなほこれにEを乗すれば第一年目の終りに於て第一回床替床に移植せらるべき苗木が播種床に何本殘存するやを示す換言すれば第一回床替すべき苗木數Nを示す故に今このNを第一回床替苗一坪當り本數S₁にて除する時はS₁を第二回床替床に移植するには何坪の面積を要するやを知ることを得べし故に第一回床替床の面積をE₁とすれば一般に
$$E_1 = \frac{M \times E \times K \times P \times R \times P_0}{S_1} \dots \dots \dots (2)$$
次にS₂を第二回床替苗一坪當りの本數としR₂を第一回床替苗の殘存率としS₂を第二回床替苗の本數とすれば前と同理により一般に第二回床替床の面積E₂は次の如し
$$E_2 = \frac{N_1 \times R_1 \times P_1}{S_2} \dots \dots \dots (3)$$
次にE₂を第二回床替苗の殘存率としP₂をその劣悪苗木率とすれば一般に山行苗の本數N₂は次の如し
$$N_2 = N_1 \times R_1 \times P_1 \dots \dots \dots (4)$$
ここに所謂劣悪苗木率の意義を説明せんに一般に最後の床替床にある苗木は所定の据置年限を経過するときは同時に總べて山行苗として山地に送るを常とする場合によりては其中なほ成長思はしからずして山行

苗として不充分なるものは更になほ一年間もとの床地に殘存せしむることありかくの如き山行苗として不合格の苗木數がもとの苗木數に對する百分率を劣悪苗木率と名づけPaを以て示したるものなり(以下次號)

文苑

男体山上より

乙 鳥 山 人

近時耳朶を敲く者曰く、宮殿下の御登山曰く、學生の遭難、曰く何、何、総てこれ山の事に係る、此處に於てか御山の山人僕輩たるもの如何か鐵脚の唸りを禁せざらんや、然れども鐵脚の唸る處は已に八千尺の高嶺なり此上は羽を延ばすか、風船を飛ばすか、ついに一つなり而して二つとも今はなし、迂濶に飛上つて千仞の谷に轉り落ちては徒に阿呆と鳥が鳴く許り、あゝ恐や。日光男体山は中禪寺湖を抜くこと約四千尺(湖面は海拔四千尺)晴れたる日には富士を初め遠くは白山、アルプス連山、近くは淺間、筑波等を望み殊に關東平野の夜景は又一壯觀たるを失はず、山上に二社あり、一は大貴己命を祭り一は田心姫命を祀る、他に明治十三年に立てしと云ふ一丈八尺の大劔あり、其及先は赤城山に向ふ、尙は昔山神と勝道上人との會見したる對面石(長さ數間優に數人を乗す)及赤城山に擬して行

者の劔撃したる巖頭あり

赤城權現の神体は不明なるも、昔此兩山神領地を争ふ事より今の戰場ヶ原の一端赤沼に於て開戦し遂に萬蒲ヶ原にて赤城方敗北其結果として中禪寺湖中唯一の上野嶋を占領したりと傳ふ然して戰場ヶ原萬蒲ヶ原は各々占領ヶ原、勝負ヶ原より出で又赤沼は兩軍の流血池をなしたるに基くとか、固まり附會の一傳説に過ぎざるも尙は古老に聞くに、赤城軍は百足、男体軍は蛇にして始め蛇軍頗る苦戦に陥り、救を常陸鹿島神社に請ひしかば、明神鹿を走らせて奥羽の弓人俵藤太秀郷に神託あり、則ち秀郷來りて椿油を以て矢を射り遂に戰勢を挽回したりといふ山人曰く、戰場ヶ原の中央に糠塚てふ高丘あり稱して神戰の際兵糧を積みて成りしものにて今日にても中より種出づと。二月四日男体山中宮祠にて武射祭あり、是戰勝の日なりと、神官數名赤城に向つて矢を放つ同日赤城にて扉を閉じ矢拔の餅を擲きて矢を避くといふ、因に日光縁起にて「在宇中將の孫小野猿丸てふ者神託を請ひ赤城の神を射ぬ」とある由日光大觀に見たり、何れも太古の事にて神已に遠し又知るべからず。上野島は上州より取りたるに名づく、一説には日光山の開勝勝道上人分骨の處なり依つて骨淨嶋より來ると、又上人嘗て上野講師に任

せられしによるとも云ふ

赤沼に就きては日光山誌に「野の中に清水湧出の靈沼あり開祖上人關伽の水を汲給ひし故を以て後世之を關伽沼原といふ」と見ゆ又廣き意味にて千町ヶ原ならんとの説あり
毎年八月一日より一週間(主に男子)及九月廿日より三日間(主に女子)を登拜期とす、前期に於ける登山者は實に數千を算し夜間提灯の光と六根清淨の聲々は一奇觀たらすとせす

(男体山植物帶の圖は印刷不可能に付不得已省略致候御諒恕を乞ふ。編輯係)

秋の山路

浪々子

旅は秋ころよく秋は山路ころよけれ、里は尙早けれど深山は紅葉や見頃ならんと遊度切りに動きて抑ふべくもあらず心隔てぬ友四人と打ち連れ立ち小春の午後の陽を浴びつゝ出で立ちぬ
萬頃の黄金の波一齊に秋風の辭を誦する所砂漠のオーシンスめきて點々たる南村北落あり、道傍一字の茅屋あり屋後に一本の柿ありて累々たる紅の眞玉を懸く我一つ欲じとは思へども其の澁さを知りて取らざるに友は早とり食ひてまづ色に迷ひし因果は觀面澁面つくるもをかし、怪鳥叫ぶ路傍の蓬々

たる藪は水通を蔽し山葡萄を掲ぐ吾も取りぬ友は喰ひぬ、急ぐ旅にしあらねば止りて眺め踞して語る、見よ奔流巖に激し白波河面を覆ふ邊り血より紅なる楓葉の千年の緑樹に反映して蜀錦の美を織り成すを又見よ水晶を溶かせる王瀧川の水の暫し休らひて作る藍靛の鏡中形も色も古りにし舟の悠々遊べるを、山あれば谷あり谷あれば水あり其の水毎に架せられ水車の少くも三四多くて十二三も段々と相重れるも可笑しからずや、來し方はむらむらと立つ狭霧に包まれ折しも落ちかゝらんとする夕日の光にうつろひて薄紅の嵐となりて棚引くが隙より緑濃き常磐木や真紅の樹々のこゝかしこ透きて見ゆるけはひ宛ら錦の引慕きたらん如く赤に紫に黄に淡く千草染めなす麓の野邊は綾の莖敷きたらん如く覺ゆおゝあれなるは常盤橋にあらずや夜の帷も下りぬるに急ぎ行きて橋の畔の破屋に草鞋の紐解かずや丸き風呂にも久し振りにて入り鮎と松茸との夕餉も終りぬ「二脈奇寒逼客房殘燈明滅夜凄凉」なる山驛の夜を一抱へに餘る火鉢を圍みて物語る樂しさ

青き煙の悠々と立ち上るは世を忍ぶ聖者の棲家か遠き小瀧の段々下るは手すさびに弾く山姫の琵琶か落葉敷きつめし道に我には最と珍らしき椽の實を踏みつゝ疎枝黄葉の間を辿り行けば懸て峠の頂にはつきの、峰巒たる御嶽と駒嶽と威容堂々紫煙霧々の中に屹立し透迤たる王瀧川宛ら一條の銀蛇なせり、此れよりは路平かに木立ちも深く木の間洩る日影さへ微にして鳴く山鳥の音に翻々と響り落つる木の葉の音も幽に聲語聲皆木魂に響く静けさ秋ならでは山ならではと思はる走りては取り取りては喰ふ木通にも飽きて後は其か皮より大なる口開きて出づる歌詩俗語さては薩摩琵琶浪花節等に木魅を驚かせしも幾度か、程なく里に出づれば粟の收納盛りにて道間へば嬉しや幾か五町にして鞍馬橋に到るべしと數分の後吾等は其か橋上に立ちて造化の妙技に恍惚たりき、水を抜く數十枚屹然として立てる巖峩たる兩巖は奮乎として兩峯の將に闘はんとする如く巖上の爛然霜に飽ける紅葉と翠蓋重く秋風に傲る常盤木とは簇々乎として群羊の相逐ふに似たり、年老いて枯死せし樹々の殘骸は枝葉落別して樹幹のみ銀針の如く高く天を刺すもよし、迅流漉々として巖を噛める河水忽ち一曲し來りて橋下に藍靛の鏡をなす藍水澄瑠璃徹底とや言はまし、背後に聳立する鬱蒼たる林中より蛟龍の深淵に臨まんとする如きは猪身の巖壁あり秋更け水瘦せて玉龍を躍

らさざるを憾む、藍水盤旋する所裏鞍馬の勝あれど歸途に譲りて沂ること三里なる水ガ瀬に急ぎぬ、茸薫る山路を超行けば一小部落王瀧に出でたり此の邊り稻刈の真中にて田圃いと賑なり、我が友の奇異の感に打たれしも理や稻刈る老嫗馬追ふ乙女は鬼まれ角まれ五十婆の大砲ぶら下げたる郵配の圖は交戦各國はいざ知らず滅多に見受けられぬ圖なり、憎らしきは青鼻垂らせる田舎俄鬼、人の道問ふに應へもせず走り去りて悪口吐くなり、いとほしきは田に働ける若き女、ふと顔あげて解せぬ面持にて暫し我等を見詰めたらしが何をや耻らひけん顔精めて稻葉の中に隠れたる、耻かしかりしは吾が無頓着禮も碌々せで道問ふ吾等を何に見誤りけん下ぐる頭もいと低く語る言葉も懇に手まで引かんする有様なる田舎人の心ばねには流石厚顔の芋書生も顔紅うせざるを得ず、路は再び山に入りしも幅廣く平かにして車を通すべし川を隔てて茂れる林中に丁々の音を聞く誠に「伐木有聲不見人白雲楚々流水潺々」の趣あり水湛へて深淵をなすを見ては彼れや氷が瀬ならんと思ひ危確亂立するを見ては彼れや然らんと思ひしも幾度ぞ、既に到りて野趣横溢せる古橋に立てば左手の截然たる斷崖削絶は鬼斧に任せて冷に峙ち右手懸乎たる森林は木魅の跳躍するに任せて永劫の秘を語りす脚下百仞窈然たる紺碧の深淵は魑魅を潜めて千古

を秘す莊重なる景口言ふ能はず筆よく寫す能はず低徊願望之を久うす畫餽すまじし霜葉途につきた、今まで心にも留めざりし霜葉の紅黄紫褐唯燃々に燃え立つ美觀遙か彼方の巖上の朱の如き黄紅の二枝此方の谷底の鮮血の如き鮮紅の一枝彼處の松の隣の夕焼の色より濃き深紅の兩三枝宛ら全山を照す炬火の如し、木の間分け入りて手折りし兩三枝に喜びしも暫しにて夕陽を受けて透き通る如きを見ては新を選びて舊を棄つる賤しき心も起りぬ

雜報

學校記事

○御眞影奉戴、十月廿六日七宮校長は皇后陛下御眞影奉戴の爲加藤書記同伴出長せるが廿七日午後三時半福島驛御到着に付職員生徒一同停車場前に奉迎し同四時半無事學校に迎へ奉り奉安室に安置し奉れり
○マラソン競走 十月廿八日遠足部主催に係るマラソン競走は本校上松間に於て行はれたるが木曾谷未曾有の快舉にて頗る好成绩を挙げ得たり詳細は遠足部宮川顧問の記

事に譲る

○天長節祝日 十月三十一日午前十時講堂に於て學式謹んで聖壽の無疆を祝し奉りぬ
○奉祝立太子式 十一月三日午前九時講堂に於て學式勅語の奉讀君が代及立太子奉祝歌の合唱並びに校長の立太子禮に關する訓話ありて嚴肅の中に閉式、午後は四時半より一同校庭に集合各自燃ゆるが如き紅葉の枝に赤提灯を結び付けたるを擔ひ福島小學校庭に至り茲に福島町民と合同し其先鋒に立ちて各町内を練り歩き忠魂碑山上にて萬歳を三唱し更に下りて町役場前に集合再び皇太子殿下の萬歳を三唱して解散せしは午後九時頃なりき
○來校參觀者 十月中旬より十一月初旬にかけては毎年觀光に兼ねて本校を參觀する者多きが本年も頗る頻繁を極めたり左に重なるものを擧ぐれば
東筑片丘小學校生徒百七十名、東筑郡立農學校生徒六十餘名、奈良縣立農林學校生徒十八名、北原、福島兩縣會議員、神戸東筑農學校長、上伊那郡朝日村視察團二十名、上伊那郡農會視察團二十餘名、長岡帝室林野管理局技師

○松原擊劍教師轉任 本校擊劍教師松原大造先生は十一月十五日付を以て長野警察署へ轉任の辭令に接せしを以て十七日先生の來校を機とし、告別式を講堂に擧げ校長の送別の辭及び生徒總代(宮島)擊劍部總代

(藏田)の挨拶あり松原氏の之に對する答辭ありて閉式せり因に先生は大正二年四月福島署に赴任と同時に本校擊劍教師囑託となり爾來今日迄熱心に教授せられ功勞尠からず因て校友會よりは餞別として金七圓を贈呈する事とせり

マラソン競走の記

天高く人馬肥ゆるの時、蘇峽一帯は二月の花より紅に、遠足に觀楓に我れ人共に心動きて見ねけるが、我れ百有餘の健兒亦脾肉の欺に堪へざりければ、長距離の徒歩競走を試みしめたり、我れとしては空前の企なりしかば、準備は如何に結果は如何にと多少疑懼不安の念にかられしも、幸無事にして又豫期以上の効果を収めたり、時は十月の廿八日、校庭より上松なる帝室林野管理局出張所前迄、此距離八哩二分、三里拾三町強、今其の概況を記さん
準備 としては、競走區間の視察と距離の實測等とにありしも、片道丈の競走にして歸路は觀楓を兼ねたる事とて、被服糧食等の運搬に少なからず苦心したり、又發表後數日の間生徒も密かに練習を爲すもあり、學校としても一二回豫備練習を爲さしめて健康を診断したり
當日 一、決勝點 たりし上松出張所前は、景勝

の地にして、市中や停車場を瞰視し、遙か壹里近くも前方を見得る好箇の場所なり、西澤先生は先づ宮島、高峯、古根等の生徒を率ひ、諸道具や賞品等を携へ、午前六時少前の汽車にて出發し、其處に諸般の準備を整へ、國旗を高く朝風に飄へしつゝ、時の到るを待受けられたり七宮校長、新家先生及予は、今井校醫並に原、伊藤の遠足部員と共に、荷物運搬等の用を兼ね、沿道の警戒ぶりを視つゝ九時十七分發の汽車にて決勝點に至り、先發隊に加はれり

- 第一に移り九時四十分となり五十分となり影だに見えず、四十五分間を期したる予の心算は充進せざるを得ざりしが、頗る(出發時より四十一分頃)白衣の姿の驅出すと見ゆしが、續いて二三、其光景勇ましくも嬉しども譬へん言葉も無かりしが、次第に近づくを見れば、矢崎清海が四十八分五十秒を以て月桂冠を戴きたるを筆頭に、左の順序を以て決勝點に入れり
- 一、矢崎 清海 四十八分五十秒(二年)
- 二、米久保春雄 四十九分(二年)
- 三、細窪友一郎 四十九分三十秒(二年)
- 四、村上 英勇 五十分三十秒(三年)
- 五、三村 善三 五十一分(三年)
- 六、武 居 章 五十一分十秒(三年)
- 七、上條 芳郎 五十一分廿五秒(三年)
- 八、今井忠雄 五十一分四十五秒(二年)
- 九、原 正 次 五十二分(二年)
- 一〇、福川 正三 五十二分十秒(二年)
- 一一、向井 惟晨 五十二分廿秒(三年)
- 一二、伊深幾太郎 五十二分卅五秒(三年)
- 一三、富士川鏡一 五十二分四十三秒(三年)
- 一四、鈴 木 繁 五十二分五十秒(三年)
- 一五、下島 俊二 五十三分(二年)
- 一六、内山伊那登 五十三分三十秒(二年)
- 一七、伊藤 善三 五十三分卅五秒(三年)
- 一八、喜多村 勇 五十四分(二年)
- 一九、井上新次郎 五十四分十秒(二年)
- 二〇、武居喜太郎 五十四分四十秒(三年)

賞に漏れたる廿一等以下を略す、斯くて大部分決勝點に入りたるを一段落となし其處を引揚げ、上松小學校を借りて暫く休憩し、全部の到着を待合せて同校講堂に一同を整列せしめ賞品授與式を行ふ、七宮校長より一等より廿等迄一々授與し終り夫より解散して各自思々に觀楓探勝の上歸路に就きけり

因に丸山信毎記者より與へられたる、金栗選手等の殘したる我邦最優の記録に依れば如上の距離は四十三分強乃至四十四分強にて足る割合なるも、夫れと是とは途の善悪素より比す可くもあらず、荒廢せる中仙道の途として、決して夫等の記録に劣らざる好成绩たるを信する者なり

山先生が最も懸離れたる一與なり、若し夫れ顧問の尤も少なく見積りたるは、激勵の意味なりと負惜まんか

緑の色香、寂しいいへば寂しく候へ共、滿山唐紅に燃ゆる最後の此の壯美に、何時しか凋落の哀愁も忘れ、前期試験終了後は、ヤレ運動會、ヤレ觀楓會、マラソン、舍生會、誰の講演、部生產品々評會、立太子禮奉祝などと

れども限りある時間の事とて午後八時目出度且つ愉快に閉會を告げ申し候。今や寮舎あたりの紅葉は散りはて、草採りに汗を絞

初雪を眺めつゝ、十一月十五日

寄宿舎通信

横井正風

緑の木蔭に涼しき風を戀ひ、泉の音に苦熱を遣りし夏の日も、時といふ力に一とたまりも無く、追ひまぐられて、刻々に褪せ行く

山先生が最も懸離れたる一與なり、若し夫れ顧問の尤も少なく見積りたるは、激勵の意味なりと負惜まんか

れども限りある時間の事とて午後八時目出度且つ愉快に閉會を告げ申し候。今や寮舎あたりの紅葉は散りはて、草採りに汗を絞

初雪を眺めつゝ、十一月十五日

可から武馬十何頭を引張り廻す有様にてさな
當事業區面積は一事業區四町歩、九、十
の二ヶ月間に八町歩の私有の區分及
林相材積調査を終了の豫定、目下森林調査
中は此後十日位を終了の見込、御座候野
生は水源農林學校出の朝鮮人通譯及日本語
通の八夫三名を貰ひ八町歩の私國分區調
査より林相調査に取係る心組にて御座候八
町歩の區分を一人にて二ヶ月中に終了せよ
の命を見られた時は嬉しくも又恐しくも有
之調査地の状況は坂本氏の言に異ならず候
只當地は鴨綠江水源白頭山の麓にて九月廿
日に降雪の有様、作物も燕麥、馬鈴薯の外
毛の地に燕麥の餅、馬鈴薯の麵類を食する始
走たる下、斯迄不便且又憐れな土地も之無
事と鹿兒島高農出の人に野生と二人にて吾
鹿兒島高農出の人に野生と二人にて吾
事業區調査に命せられ至極多忙を感し申
二人位にて何町の調査は不可能と思召し
の事と存じ候が其の調査は如何處に何種
の程ありや、川道の關係は如何、位の所
高山に登り望遠鏡の力を以て林相を入れ材
積は標準地を取り目測にて材積算出極め
簡單なるもの候區分も見取圖(高曲線入
り)を書き境界線を目測にて記入仕るべく
凡て目測本位にて候
本月八日より鴨綠江岸惠山鎮を出發仕
武士行列官吏の意張る事此上も之無候歸
の後は林士十名高農實科出十三名法學士
一名理學士一名早稲田一名等學者の御揃
ひに候へば出張中の不勉強を補ふ考へに御
座候右は朝鮮山況一報迄時節柄御身大切
被遊度先は早々敬具(十月廿六日咸鏡南道
甲山郡雲興面東薪泊にて)

○在朝鮮 渡邊知則君より(會長宛)

左は八月十七日付の書面にて稍々舊聞に屬
すれども興味あれば一節をかゝぐる事とせ

○會員消息

有賀正一君 十月下旬高知縣馬路小林區署に赴任
渡邊知則君 朝鮮江原道楊口郡廳在住の同君は明年一
月十五日より向ふ一週間總督農林學校に於ける農業技術
編纂兼發行人 安井正
長野市西後町丙二十一番地
印刷所 田中彌助

(前略) 御承知の通り金剛山は本道(江原
道)の北部に位置し其領域十里四方に跨り八
千峯八万谷と稱し居候而して日本海に面せ
剛と俗稱致居候山概ね花崗岩より成り山
骨の露出せる所遠く之を望めば白皚々たる
もの有之候小生の探勝せしは内金剛のみ
有之外金剛は未だ跋渉仕候當揚口郡より
二十里金剛山一行三人炎暑をも物もせず
到着其翌日一行三人炎暑をも物もせず
無致候末輝里宿より長安寺に稱する五
陸離恰も日光の如く清流に臨み樹林に圍
れ幽邃言はん方なく清流に到れば巨岩奇
眼前に迫り來り快哉を叫ばしめ清流に沿
ひ上れば世界の偉觀と可申妙義山に到
光景眞に胸突く岩坂の或は斷崖の中腹を過
へ丸木橋の或は岩の隙道に之を通る時は顔
色も失せ大峽地に入れば何百丈とも知ら
し巨岩の道の兩側に迫りて今にも落ちか
ん此處を幽邃をきき又海底の龍宮も之に
候一層壯麗幽邃をきき又海底の龍宮も之に
過ぎじと思はれ候又十町にて一小寺あり
處は内金剛の極地にして此より與は猛虎の
洞穴と稱せられ入る者なし既に午後五時
安寺より一夜を過し候が夜間不叶悲惨なる
襲せられ一夜の夢を結ぶ事不叶悲惨なる
一夜を明し申候明る日は前日の道をたど
り所々尼寺など訪問し未輝里に一泊歸郡致
候聞く所の勝景に富む由何れ機を見て一見
報導申上べく候(下略)

員講習會へ出席する由
○小羽根安治君 今回茨城縣日立鐵山に轉任せらる
○等々力官一君 病氣の爲め辭職され歸郷療養中
○平田稻男君 小縣郡四内村に轉任施業基案編成に従事
○羽田龍尾君 今回東京目黒林業試驗所に轉任せり
○小林英一郎君 九月より北海道釧路山越郡八雲村福島
牧場に行かる

第十六回運動會收支決算
一金百四十七圓八十四錢 總收入高
內贈金百三十六圓四十五錢 贈附金、金十圓 校友會運動會
費、金一圓三十四錢 賞品 殘賣上金、
一金百十二圓二錢五分 總支出高
一 內贈金五圓六十七錢二分 庶務部、金二十四圓七十錢五
圓賞品部、金六圓三十五錢 賞品部、金三十六圓七十
圓 四圓五圓 接待部、金十三圓六十八錢五分 風俗部、金十
圓 四圓六十九錢 餘興部、金四圓四十八錢 六風借物部、金十
差引殘金三十五圓五十八錢八厘

林友代領收報告
金五十錢 中田辰雄君 金一圓本多清右衛門君 金一圓二十六
錢 中澤錫中田辰雄君 金一圓六十二錢 小池新伍君
金十四圓 佐藤一君 金一圓 宮澤清君 金一圓四
矢村君 金一圓 五十六錢 遠藤治一郎君 金一圓四十二錢 澤
君 金一圓 五十六錢 遠藤治一郎君 金一圓四十二錢 澤
君 金一圓 五十六錢 遠藤治一郎君 金一圓四十二錢 澤

廣告

拜啓多年擊劍教師として本會の爲盡瘁
せられたる松原先生には今回長野警察
署へ御轉任相成候に付ては多年の功勞
に酬ゆる爲醜金贈呈致度候間御賛成被
下度左記御承知の上御送金願上候
一金額は御隨意の事
一締切は本年十二月末の事
一受取證は別に不差上本誌上にて發
表の事
一校友會宛之事、振替は東京一七六
十一月十七日

卒業生各位 校友會
十一月十七日

長野市西後町乙二十一番地
長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所 瀧澤書店

大正五年十一月廿三日印刷
大正五年十一月廿五日發行